

風に見える街

新宮 晋

1937年大阪生まれ、'60年東京芸術大学絵画科卒業。'60-'62年ローマ国立美術学校絵画科に学ぶ。'63-'65年ヨーロッパ各地で個展。'66年ミラノ・ブルー画廊ではじめて立体作品を発表。'67年第2回現代日本彫刻展で宇都市野外彫刻美術館賞受賞。'71-'72年ハーバード大学視覚芸術センターより客員芸術家として招かれ渡米。'79年第4回吉田五十八賞受賞。第8回現代日本彫刻展で「遙かなリズム」が国立国際美術館賞及び兵庫県立近代美術館賞受賞。'80年第8回長野市野外彫刻賞受賞。'85年横浜ビエンナーレ野外彫刻展で大賞受賞。第18回日本芸術大賞受賞。'87-'88年世界巡回野外彫刻展「ウインドサーカス」をヨーロッパ、アメリカ各地で開催。'88年ソウルオリンピックで国際彫刻シンポジウムに作品「羽ばたき」で参加。'89年第6回ヘンリー・ムーア大賞展で特別優秀賞受賞。パリ市、パリ・アート・センターで個展開催。他に近年の主な作品は'87年「空の飛行」(ローガン国際空港)、『88年「宇宙へのメッセージ」(新宿西口広場)、『89年「水の広場」(名古屋・若宮大通公園)、『89年「風の音符」(横浜美術館)など。風や水といった自然エネルギーをとらえるユニークな動く造形で国際的に活躍している。



「空の鼓動」
1988年 読売テレビ(大阪)

新しい駅ができる。郊外の殺風景な土地にある日、まったく思いつきのように一軒の家が建ち、(もしかしたら駅はずっと後からできるのかもしれない) だんだんと商業ビルが建ち、ホテルができ、集合住宅ができ、唐突と思われた駅や家の出現はいつのまにか新しい地図のなかにおさまってしまう。そうして人はたぶん今まで行ったこともなかったその土地の住人になる。

土地と人との間に“罅(いわれ)”がなくなってしまった。現代人はあらかじめなんの準備もされていなかったその土地に、ほんのちょっとした理由で住み、仕事をするようになる。だから、しばらくのあいだ、その土地は彼にとって他人だ。新しい土地の新しい住人にとっての大事業とはおそらく、彼らの故郷を創ること。その前にまず、その土地と知り合うこと。土地の体温を知ること。土地の空気を臭ぎわけること……。

新宮晋氏の作品は、そうした見知らぬ空間と人を結びつける交感の装置といえるだろう。赤や黄色の、あるいは色のないうすい金属の羽は風の動きのままにゆるやかなリズムを奏でる。それは人間には感じられなくなった微妙なメッセージまでも伝えるように、動き揺れる。

その時、私たちは風を見るのだ。未知の空間に立つ私たちに共通の思いを伝えるように、ここはあなたたちの場所ですと優しく囁くように。

風はおそらくもっと大きな存在からの使者として、自然の豊かさ、おおらかさを運び、それを繊細な装置が翻訳し、私たちははじめて不思議なつかしさととらえられる。その時から、この新しい街は人にとっての新しい故郷となるのだろう。運ばれるものは宇宙からのメッセージでもあるかもしれない。そう考えるとこの新しい故郷はもっと楽しい。